

生活環境から捉える医療——小児アレルギー

埼玉協同病院小児科



▲埼玉民医連 埼玉協同病院 開設:1978年
所在地:埼玉県川口市 一般病床数:401床

【実習プログラム】	
8:30	朝会 オリエンテーション
9:00	小児アレルギー初診外来
	小児科 和泉桂子医師
13:30	乳幼児健診
	小児アレルギー外来
17:00	レポート記入
18:00	実習ふりかえり

幼少期 — EARLY LIFE —

「観察調査ならびに介入研究によれば、成人の健康の基礎は胎児期と乳児期に形成される。この時期に発育不良や愛情不足であったりすると生涯を通じて病気がちになったり、成長した後でも体力や認識力の低下、情緒不安定を招く恐れがある。幼少期の体験不足や発育不良は発達過程において生物学的にも影響を与え、一人ひとりの生物学的・人間的資質の基礎を形成し、生涯影響を与える。」

出典:「健康の社会的決定要因 確かな事実の探求(第二版)」(SOCIAL DETERMINANTS OF HEALTH THE SOLID FACTS)発行 WHO健康都市研究協力センター・日本健康都市学会



埼玉協同病院でもかねてより「生活と労働から疾病をとらえる医療」というものを提倡してきました。小児アレルギー外来でも、アレルギー症状を抑えたり、予防する事で終わりというのではなく、子どもの栄養状態、家族との関係や、食生活、住環境にまでアプローチし、食物アレルギーの克服から、患者さんのその後の人生をより豊かなものにしようと取り組んでいます。

近年、WHOのチームがまとめた「健康の社会的決定要因」でも、「幸福な幼少期を過ごす事」「人生の良いスタートをきること」が人々の健康状態を決定するひとつの中として取りあげられています。今回は、診療のほかにも「子育てわいわいサークル」「離乳食教室」など様々なアプローチで子育てを支援している埼玉協同病院での実習をレポートします。



毎年、病院の中庭で行っている子育てわいわいサークルのサマーパーティー。子育て教室を卒業した親子のサークルです。



埼玉協同病院子育て支援チームで行っている子育て教室。「子どもの発達」「乳幼児期の食事」「子どもの病気とみんなで子育て」をテーマに開催しています。

小児アレルギー外来 実習ふりかえりシート

東京女子医科大学 医学部医学科2年 黒須友理香

1) 疾患について学べましたか?

遺伝などによって皮膚のバリアが未熟であると、そこから原因物質が侵入し、感作が進行してしまうことや、皮膚の状態が食物アレルギーに大きく関わっている事(経皮感作)を学びました。原因食物の除去だけでは、誤って食べてしまった時にショック反応を起こしてしまう危険性が高まる。食べないままにするのではなく、安全を確保しながら少しづつ食べ、感作を減らしていく事が望ましいことを学びました。(食物負荷試験)

2) 診察や患者さんについて、印象に残ったことをご記入下さい。

幼い子ほど肌が敏感な為か、見て分かる湿疹が多くかった。原因が祖父母の家にある事や、ペットの飼育の有無にある事もあり、多くの事を聞き取る事が重要だと思った。食物負荷試験の進み具合は、家庭の状況によって変わってくる。食のバランスも考え、家族全体の食事を整えていくことで、子どもの健康を支えていく事も、医療の一環であることを実感した。栄養士との連携が大切で、症状や疑われるアレルゲン、薬の使い方や治療方針について医師が説明し、診察に立ち会っている栄養士が、細かな食事計画を家族と相談していた。

3) 「幸福な幼少期を過ごす事」が、健康の社会的決定要因の一つとしてあげられています。この提案とあわせ、一日をふりかえっての感想をご記入下さい。

食物アレルギーのある子が、健康な子と同じ様に食べられるようになるのは幸せな事で、子どもの人権にとても大切なことだと思う。医師も医療者の一人として、子供が健やかに成長していく為の手助けをしていく。症状を診断するだけでなく、家族状況や周囲の環境、食生活も把握して、子供が成長できるよう指導したり、対策を考えたりする事が大事だと感じた。新患外来では、最近の食物アレルギー治療を知らないお母さんお父さんがほとんどで、知人などから、生涯にわたる厳格な除去や、離乳食を遅らせるなどの従来の対処法だけを聞いている方に、時間をかけ丁寧に説明し、理解を得ていく姿が印象的だった。対処法のみならず、離乳食の指導や、偏食などお母さんの食事についての指導を行うところに、和泉先生の小児医療に対するこだわりと、アレルギーだけでなく、食事から変えて、子育てを支援しようという信念を感じられた。小児医療が身近に感じられる有意義な実習でした。

担当医師よりメッセージ

両親が楽しく子育てすることは、子どもが「幸福な幼少期を過ごす」重要な条件なので、小児科では常に子育て支援の視点が求められると思います。実習に熱心に取り組まれ、当科の食物アレルギーの指導から、子育ての視点を学びとっていただけたことに私も栄養士も嬉しく思っています。

埼玉協同病院 小児科診療部長 和泉桂子



労働環境から捉える医療 ——炭鉱労働者の健康権を守る立場から

米の山病院 医師 橋口 俊則

【当日の実習スケジュール】

- 8:30 じん肺認定患者さん（A氏）同行による探訪フィールドワーク
- 13:00 じん肺認定患者さん（B氏・入院中）への聞き取り
- 14:00 労働衛生外来（橋口医師）
- 15:30 患者救済制度のレクチャー（労災保険、じん肺手帳など）

福岡県大牟田市はかつて日本最大級といわれた「三井三池炭鉱」があった町です。石炭の産出によりこの国の大近代化を支えてきました。しかしその中で炭鉱労働者の多くは「じん肺」という病気に罹患しました。じん肺とは、粉塵の発生する病氣に罹患しました。じん肺とは、粉塵の発生する場所で仕事をしている方が粉塵を長い年月にわたって多量に肺に吸い込むことで、肺の組織が纖維化し硬くなってしまふ病氣です。仕事が原因で引き起こされる職業病の一つに分類されます。じん肺の初期症状は息切れ・咳・痰が増えるなどです。

が完治することはなく、進行すると呼吸困難を引き起こし死にいたる恐ろしい病氣です。大牟田は元炭鉱労働者の方が多く、診察する上で職歴を聞くことは非常に大切なことです。職歴からみえる病気を知らなければ気づけない部分もあります。じん肺を見落とし、ただの肺の病氣と思い処方や処置をしてしまつと、患者さんの症状がなかなか改善しなかつたり、活用できたはずの社会保障制度での支援ができなかつたりと患者さんに不利益が生じます。

今回はじん肺に限った話でしたが、職業病は地域によつて様々です。今後はアスベストの患者さんもますます増え続けます。疾病的背景には何があるのかをしっかりと捉えるためには、地域の産業を過去・現在にわたりつぶさに調べて患者さんと向き合うことが大切です。このことが労働から疾病を捉えることにつながると思います。

※三井三池炭鉱とは福岡県大牟田市と熊本県荒尾市にまたがる国内最大の炭鉱。1963年の三川鉱炭塵爆発事故では死者458人、CO中毒患者839人を出した。これは戦後最大の産業事故と言われ、保安無視の生産第一主義が原因と言われている。1997年3月30日に閉山。



▲旧三池集治監外堀（県指定有形文化財）…現代でいう刑務所の前身。当時1000人くらいの囚人が収容されていた。500m先にある宮原堅坑（国指定重要文化財）まで鎖でつながれ連行され、劣悪な労働条件の下鉱内労働を強いる場所で行われた。



▶宮原坑跡（国の重要文化財）…大斜坑の坑口跡・プラットホーム炭鉱列車や重機が展示してある。宮原坑は明治21年開坑し、昭和43年に閉坑。



▲万田坑 第二豊坑内部…当時の労働現場を実際の目でみることで、どのような労働環境であったのか想像することが出来る。

▼万田坑跡（国の重要文化財）…当時の日本の近代化を支えていた炭坑の一つ。実際に施設内に入り探検が可能。明治30年に開坑し、平成9年に閉坑。



じん肺実習レポート

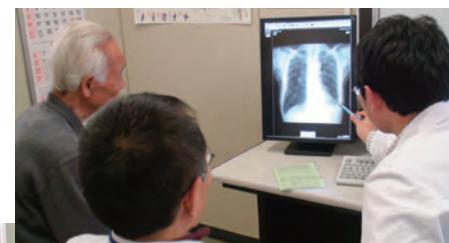
九州大学医学部医学科5年 副島忠弘（そえじま・ただひろ）

汗と埃にまみれ、暗闇の中を、己の体一つを武器に情熱にあふれるまなざしで、生き生きと働き続ける労働者たち、私が今回の実習で感じ取ったのはこういった炭坑労働者のダイナミズムだった。この実習で出会ったのは自分の仕事に誇りをもち、一心不乱に働いて日本の発展に貢献してきた人たちだった。ダイナマイトで坑道を切り開き、粉塵にまみれ、時には落盤に遭い、我が体を顧みずに入り続ける。塵肺にかかっていると採用されなかったり、異動になつたりしてしまうので病を隠して働き続けた方もいた。今では塵肺を煩う、一老人となつているのだが、当時のことを語るときの様子は輝いていた。

炭坑労働者の中には、豊富な年金を受け取り、労災の適用を受けて金銭的に豊かな人もいれば、下請けとして働く者、給与も低く保証も受けられない人もいる。

経済的に豊かな人が病気であっても、我が身の医療費を払えない貧しい人が病気になっても診療を断らず、どちらも病に苦しむ患者として、病の苦しみを治療し、癒すことなく力を使つことが無差別平等の医療なのだと感じる。

炭坑には、まだまだ多くの歴史が埋まっている。囚人労働をさせられ、倒れると打ち捨てられた人々、囚人労働の劣悪さに声を挙げた医師の話、戦時中の韓国人、中国人労働者、大量解雇と抗議デモの歴史、他の地域に先駆け超高齢化した経緯。学ばなければならないことは、山ほどある。もちろん、塵肺の治療法も、である。今後もさらに学びを深めていこうと思う。



じん肺患者さんとの懇談

●医学生レポート●掘進作業で先頭に立って働いていた方に話をうかがい、当時の労働の様子や作業に対する熱意、当時からじん肺を患っていたが、それをおして仕事を続けていたことを聞いた。崩落事故も何度も経験しているとのことだった。※掘進とはトンネルや坑道などを掘つて進むこと。

労働衛生外来 労働から引き起こされる疾病、職業病（じん肺やアスベスト、振動病など）の患者さんを診ている外来。実習では患者さんに問診したり、簡単な身体診察を体験。

●医学生レポート● 診察するためには患者さんがどんな作業をしていたかを知ることが大切であり患者さんから話を聞きだすためにある程度作業に関する知識が必要であることや、会話する手段がいるということが分かつた。症状や病気の進み具合はまちまちで患者さんごとに治療を考えいかないといけないと思った。